

---

# 面接試験の極意

コーキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

面接試験の極意

### 【著者名】

コーキ

N6250D

### 【あらすじ】

劣等生のटイが高校の面接試験に向かう前日、父は面接試験の極意を伝授するべくその手を引いて歩き出した。

劣等生。

俗にそう呼ばれる存在、それが私の長男のとくより我がガキ共3姉弟である。

末弟の長男はその事実によつて今時、受験する高校すらなかなか決定しなかつたほどである。

が、とりあえず金はかかるが何とか滑り込めるであろう私学高等学校を中学校側で探してきてしまつて、劣等の長男を中卒で働かせて早々にリタイアして悠々自適の暮らしを夢見ていた私の日論みは崩れ去つた。というのも妻も中学校どぐるになつて金のかかる私学高等学校への入学を私に進言し、私としては渋々この案を受け入れるしかない状況に陥つてしまつたからである。

ともあれ、私の性格上、一旦決めたことに対するはしつかりと完遂せねばならないと言う義務感があつて、筆記試験、これはもう劣等ながらも倅本人が筆記するわけだから私は日々飲酒しながら革ムチを振りかざして倅の尻を打ち据え、D▽だD▽だと妻や娘や倅本人にまで罵倒されつゝ、それでも意志を曲げることなく打ち抜いてだから、できる限りの努力はした。あとは倅が正解をひねり出して合格すればいいのだと、試験当日はひとり飲酒しながら大声で歌い、踊つて倅の帰りを待つた。

「あんまり手応えがなかつた」

そう言つて緊張感皆無でへらへら笑いながら帰宅した倅を見て私の肩が落ちた。

こらあだめかもしけん。革ムチを震いすぎてマメがはぜ、皮膚がめくれあがつた私の掌。それをじつと見つめていたら少々泣けた。私の努力は報われなかつた。劣等息子の無能がために。

しかたがない、こいつには中卒で労働してもらおう。おーそうしてこいつが力ネを稼げば私は悠々自適ではないか?と筆記試験対策

のためにしばらぐ忘れていた本来の目的をふつと思いだしてしまった私は、砦の肩をバンバン叩きながら「そうかそうか、しかたがないね。明日、父さんと共に職安に行こう」と、更に安酒をがぶ飲みしながら”アナー・キー・イン・ザ・シク”を歌い、ポゴダンスを踊つたのだが、そんな歓喜の父を眺めながら砦が吐かす。

「明日は面接試験だから」

このへらへら劣等小僧めが。

女らしいヤツ。筆記に失敗して帰宅したのにも関わらずまだそんなことをいいやがる。筆記に失敗すれば面接なんか受けたつて無駄に決まつていい。私は尻を振りながら洗濯物を干していた妻を呼びつけ、自分の意見を伝えて同意を求めた。

「最近の高校は学力より面接が重要なのよ」

妻といつのはどこの家庭でも同じだ。

よけいなことしか言わないのである。

私は歓喜から絶望に墜ち、うなだれながら砦の手を取つて一言、「さあ、こじうか」

そう呟き、共に家を出た。

とぼとぼと歩く田舎町の情景。

怒りと悲しみがこみ上げ、通り過ぎるババアを殴打した。

絶望にかられて、通り過ぎるジジイの顔面に回し蹴りをくれた。

自棄になり、若い母が押す乳母車から乳児を盗んで中空に放り投げた。

そんなハッ当たりをしながら商店街のど真ん中へ辿り着いた私は、往来のちょうど中央へ砦を誘つた。

「いいか砦よ、よく聴きなさい。面接試験の極意を最低限で教えてくれと訊かれれば『でつかい声でハキハキと』と私は答えるであろう」

「へえ、そう」

「そんな間の抜けた、牛糞の如き返事をするでない。要するに面接試験の極意は恥も外聞もかなぐり捨てた『絶叫』であるから、筆記

でへタこいたおまえに残された道はただひとつ、他の受験生はもとより試験官よりも誰よりも大きな声でハツキリとした受け答えをする」とある、「

「なるほど、で？」

「なんだよ、まだわからんねえの？だからそのための練習で「口」まできてるんだから、やるぞ。いいか私が今からするよつておまえもしなさい」

「なに、それで直接は通るの？」

「だからそう言つてるじやないか、つーかもつ「口」しか残つてないんだよ、方法は」

「そ、わかつた。で？」

と、そんなオリエンテーションの後に私は胸を反らし、両手を後ろに組んで目玉をひん剥きながら限界まで空気を肺に溜めてから

「ゼツキヨー……」と絶叫した。

直後、それまでざわついていた商店街は無音の世界と化した。

「ほり、やれよ。おまえの番だ」

「なんか、恥ずかしくね？」

そんなことを言つて倅の顔面を私は全力で殴打した。

血しぶきを吹き上げながら中空を舞い、路上に倒れた倅の背骨に安全靴で一発、蹴りをくれてから私はヤツの襟首を掴んで引き起こした。

「やれ」

倅の鼻骨は見事にへし折れていで、顔面そのものが変形しているようにも見えたがそんなことを気にしている場合ではないので、私はそう言つて倅に絶叫を命じた。

「ゼツキヨー！」

倅は顔面を痙攣させながら絶叫した。

「カツゼツがわるい！！」

私はそう言つてまた、倅の顔面を殴打した。

一旦ひっくり返つてから起きあがってきた倅は口内に裂傷を負つ

たのか大量の血を吐きながらフガフガ言つていて、口を動かすたびにへし折れた歯がこぼれ落ちていた。

父「ゼツキヨー！」

倅「ゼツキヨー！」

父「ゼツキヨー！」

倅「ゼツキヨー！」

父「ゼツキヨー！」

倅「ゼツキヨー！」

父「ゼツキヨー！」

倅「ゼツキヨー！」

父「ゼツキヨー！」

倅「ゼツキヨー！」

父「ゼツキヨー！」

夕焼け雲は美しい。

私はもはや誰だかわからない程に顔面の膨れ上がった倅の手を引いて家路についていた。

よくやつた。私も倅も。

商店街の路上に血溜まりを拵えながら父から子に伝授された面接試験の極意。

私はすっかり醜く成り果てた倅がやけにことおしくなつて路上にしゃがみこみ、

「久しぶりにどうだい？」

と倅に背を見せた。

ズズツと鼻血をするする音を返事として、倅が私の背に身を預けてくる。

私は少々ヨタヨタしながらも立ち上がり、「重くなりやがつてかなんか言つ。

倅の血液でシャツが湿つてくるのがわかり、親子の情を交換しているという実感に私は泣いた。

帰路、幸福のあまりハイになつた私は、脇を走りすぎよつとする小学生の前に脚を出して転倒させて喜んだ。

そして、僕を真ん中にその夜は妻と3人川の字で就寝した。

翌日、青黒く腫れ上がつた顔面に瘡蓋をこびりつけて起きてきた僕を

「オハヨー！」

と絶叫で迎えた。

「オハヨー！」

と、僕の唇は動いたのだが、え？声が聞こえない。

カツゼツとかそう言つた問題ではなくて空気だけが漏れている。

妻は溜息をついた。

僕は頭を搔いた。

私はひとつ咳をして「練習し過ぎちゃつたね」と微笑した。

結局やはり私には悠々自適の生活が待つていたのだ。

いやいや、結果オーライである。

苦労は報われたのだ。

中卒の僕、万歳。

そうかそうか。

私は”ヒア・ナッシング・シー・ナッシング・セイ・ナッシング”を大声で絶叫しながら卓袱台に飛び乗り、そして玄関扉に向けて思い切りダイヴした。

(了)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6250d/>

---

面接試験の極意

2010年10月8日15時10分発行